



Title	雑誌『ニコニコ』発刊への道程
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日本語・日本文化. 2025, 52, p. 160-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100661
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

雑誌『ニコニコ』発刊への道程

はじめに

筆者は前稿『笑う写真』の誕生―雑誌『ニコニコ』の役割―^(一)において、以下のようなことを明らかにした。

・ 明治時代（一八六八～一九一二年）の写真には笑っている写真は少なかった。

・ 明治時代にもわずかに笑っているものはあるが、それは身分の高い人ではなく、いわゆる庶民のみであった。当時、身分の低い男性や女性、そして子どもたちだけは写真でも笑っていた。図1は明治二三年（一八九〇）頃に撮られた写真である^(二)。

・ 明治四四年（一九一一年）二月一日、「ニコニコ倶楽部」という倶楽部が発足し、雑誌『ニコニコ』が創刊された。図2は発刊時直前に出された広告である^(三)。



図1：働く女性の笑顔写真
（モース・コレクション）

岩井茂樹



図3：雑誌『ニコニコ』創刊号表紙
(筆者蔵)



図2：雑誌『ニコニコ』創刊広告
(『読売新聞』)

- ・この雑誌はその「口絵写真」に当時の有名人や身分の高い人々の笑顔写真を多数掲載した。例えば、夏目漱石や森鷗外、幸田露伴、与謝野晶子、巖谷小波などの文化人や、渋沢栄一、大倉喜八郎、後藤新平などの財界人や政治家、大正天皇をはじめとする皇族の人々、乃木希典などの軍人たち、それに森律子、松井須磨子などの当時の人気女優たちや、外国人などの笑顔写真も掲載されている(四)。代表例として、夏目漱石の笑顔写真を図4として示す(五)。
- ・この雑誌では、階級、身分、性別、年齢などに関わらず、皆が笑って過ごすことが大切であることが繰り返して説かれた。
- ・この雑誌の編集を主に担ったのは、当時不動貯金銀行・理事であった松永敏太郎であった。
- ・雑誌の巻頭には必ず不動貯金銀行・頭取である牧野元次郎が寄稿した。
- ・この雑誌は多い時には月七万部発行をしていたが、これは当時の雑誌としては第二位の発行部数を誇っていた。
- ・この雑誌が多く発行され、「ニコニコ」という言葉

一 青柳有美による紹介

すべての始まりは、青柳有美による紹介であった。彼は当時の人気雑誌『実業之日本』に「寸鉄活人 心言臆語」という連載をしていた。彼はその中で、アメリカにおいて笑顔推奨運動が行われ、それが大きなムーブメントになっていることを紹介した。次に示すのがその記事である。

▼米国に『ニコニコ倶楽部』なるものあり、千百七年十一月、同国財界の不況が人心を悲観に傾かしむるの弊をすく済すくはんとして組織されたるものなる也。近きかくカーネギー翁その会長に推選せられて五十万弗を寄附す。会員今



(十の繪口號八十四第ニコニコ)

図4：夏目漱石の笑顔写真
(『ニコニコ』第48号)

も流行語になった。その影響によって、人々は写真の前でも笑うようになったのである。

こうしたことを明らかにしたが、その際、どうしても明らかにできなかったことがある。それが「ニコニコ倶楽部」の創設と雑誌『ニコニコ』発刊の経緯である。

本稿は、雑誌『ニコニコ』発刊の経緯を明確にすることを目的とするものである。当時書かれた資料を基に、その経緯を時代背景も考慮に入れないながら、本文中で明らかにしようと思う。

本稿では読みやすさを考慮し、ルビなどは必要な箇所以外は省略した。逆に二字以上の繰り返し記号は、該当する文字を補った。また漢字も旧漢字を常用漢字に改めたことを付記しておく。

や二十五万人。その綱領に曰く『総て汝の悲みを葬れよ。ニコニコせよ唯ニコニコせよ。』と。然り、笑ふ門には福来る。ニコニコせよニコニコせよ。渋沢栄一はニコニコして福を招ける人也。大倉喜八郎もニコニコして同く福を招ける人也。(六)

この記述から、アメリカでは不況による悲観的なムードを取り払おうとして、一九〇七年一月に「ニコニコ倶楽部」なるものが結成されていたことがわかる。鉄鋼王・カーネギーがその会長になって、五十万ドルを寄付し、今やその会員数は二五万人にも及ぶという。その倶楽部の綱領には、「悲しみを葬れ、ただニコニコせよ」という主旨の文言があるだけだという。日本には古来「笑う門には福来る」という文言がある。そういえば、かの渋沢栄一や大倉喜八郎などはいつもニコニコしている。彼らはニコニコによつて福を招いた人たちなのである、と言うのだ。

図5が青柳有美の写真である(七)。



図5：青柳有美肖像写真

1873—1945 明治—昭和時代前期のジャーナリスト、随筆家。明治6年9月27日生まれ。明治女学校の教師をつとめ、明治26年から「女学雑誌」にかかわり、のち主幹。大正にはいつて「女の世界」の主筆となった。昭和20年7月10日死去。73歳。秋田県出身。同志社普通学校卒。本名は猛。著作に「恋愛文学」「有美臭」「有美道」など。(八)

青柳有美は、今ではあまり知られていない存在だが、当時はかなり有名で影響力のあるジャーナリストであり、多くの著作も遺している。短い一文であったが、この文を読んだ人は決して少なくなかったものと思われる。

二 黒田湖山への影響

青柳有美に続いて、アメリカの「ニコニコ倶楽部」を紹介したのが、小説家の黒田湖山である。彼の事績は次のようなものである。

1878—1926 明治—大正時代の小説家、新聞記者。
 明治11年5月25日生まれ。東京専門学校（現早大）にまなび、巖谷小波に師事。中央新聞社、中外商業新報社などにつとめる。明治32年キプリングの「ジャングルブック」を「狼少年」の題名で翻訳し、35年「饒舌」を発刊、主宰した。大正15年2月18日死去。49歳。滋賀県出身。本名は直道。作品に「大学攻撃」など。^(九)

彼は『少年世界』一九一一年一月号で、かなり青柳有美よりもかなり詳しい記述を残している。全体的には引用が長くなるが、貴重な証言であり、また現在で



図6：黒田湖山「微笑倶楽部」
 (『少年世界』第17巻第1号)

は中々入手困難な資料なので、少しずつ分けながら丁寧に見ていこう。

記事のタイトルは「微笑倶楽部」である。

まずは「倶楽部の頭は大統領」という段落から見ていく。

世界中で最も多くの会員を持つて居る倶楽部とは言へば、それは米国の楽天倶楽部であろう。楽天倶楽部の目的は何かと聞くと、いつも微笑して、にこにこした顔をして居るといふ事になる。だから、此の倶楽部は、また微笑倶楽部とも、にこにこ倶楽部ともいふことができる。此の倶楽部は、三年ばかり前米国のウトーという処で初めて起こったもので、今も本部は米国に置かれているが、倶楽部の仲間となつて居る会員は世界中に広がつて、其の会員の総数は二十五万人を越えて居るのであつた。(二〇)

ここまでの記述から、この倶楽部はおそらく英語では「Optimist Club」であろうことが推察される。それを青柳有美は「ニコニコ倶楽部」と訳し、黒田湖山は「微笑倶楽部」と訳しただけで、同じ倶楽部の紹介である事には変わらない。

創立は今から三年ほど前というから、一九〇八年前後のことであろう。これも青柳の説とほぼ同じだ。「いつも微笑して、にこにこした顔をして居る事」というのも、青柳が紹介したニコニコ倶楽部と同じである。この倶楽部が「ウトー」つまり、ユタで起こったこともわかる。本部はアメリカにあるが、今や世界に広がり、その会員数は二五万人を越えているともいう。

続きを見てみよう。

此の倶楽部を起した人といふのは、鉾山の仕事をして居るウイリアム、ジェー、ロビンソンといふ人であつた

が、総裁は、米国の前大統領でもあつたルーズベルト氏で、今の大統領のタフト氏は会頭、それから米国の大富豪カーネギー氏と英国の大楽道家ハーリー・ラウダー氏とが、副会頭に選ばれて居る。斯ういふ風であるから、会員には、独り米国ばかりで無く、英国でも、仏蘭西でも、独逸でも、各国の名だゝる人が皆入つて居る。(二)

最初にこの倶楽部を起した人は、鉱山の仕事をしているウィリアム・J・ロビンソンという人であつた。おそらくそれに賛同し、この運動を広める為もあつてか、最初は、前大統領のルーズベルトが総裁に、そして現大統領のタフトが会頭に(二)、鉄鋼王・カーネギーとイギリスの大楽道家・ハーリー・ラウダーが副会頭に選出されたようである。この運動はアメリカだけに留まらず、今やイギリス、フランス、ドイツなどにも広がり、その「名だたる人」つまり有力者や有名人は全員会員になつてゐるという。

ここで注目しておきたいのは、ほぼ名もなき鉱山師が起こした、いわば下からの運動であつたことだ。この点は、いかにもアメリカらしい。それが認められルーズベルトやタフトなど大統領にまで影響を与えていることも興味深い。そしてわずか三年ほどの間にイギリスやフランス、ドイツにまで広がっており、各地で決して小さくない運動として活動が行われていることもわかる記事である。

次の「いつも微笑して居る決議」という段落に移ろう。会員についてわかる記述がある。

此の倶楽部の会員たるものは、いつでも機嫌の好い、しつかりとした、満足と希望と勇氣に満ちた心をもつて、楽しく其の日其の日を送る約束になつて居る。其の会員同志の決議といふのは次の如きものであつた。

『われわれは、何時如何なる時でも、すべて人類に対して親切にするやう力めやう。また色々な動物に対しても同じく親切にするやう力めやう。吾々は、晴れやかな心地をもつて居やうと思ひながらも荷が重くつてそれを持つて居ることのでき無い老人に対しては、礼儀正しく且つ思ひやり深くしやう。吾々は、すべて弱々しい、力の

無いものに対する義務を守つて、女や稚いものに向つては、常にやさしくしやう。自分の心配らしい顔色から、他に不愉快な心地を起させ無いやうに、吾吾自身の心配や、うるさい事に対して十分堪へ忍ばう。吾々は、自分の微笑を含んで居る顔色から、他が愉快的な氣を持つやうに、何時如何なる時でも、常に機嫌の好い心地をもつて、絶えず微笑して居るやう力めやう。吾々は、他の人人も皆正しい分配を得るやうに、われ一人先を争つて、自分勝手なことをし無いやうに力めやう。吾々は、すべて他の好か無いやうなことを言は無いやうなことを言は無いやうにしやう。他の讒言を言つたり、他のことを謗つたりし無いやうにしやう。つまり吾々は、此の辛いことの多い世間を、成るべく悲みの少いやうにして暮らしたいと言ふのである。此の吾々が生活して居る一日々々は、決して二度とまた来るものではない、其の大切な一日々々を面白く無く、不愉快に暮らして置いて、後からもう一遍やりなほさうと言つたところで、それは、瓶の口を開けて出してしまつた瓦斯と同様、到底とりかへしのつくものではない。これが吾々の決議である。此の決議は、吾々をして此の世を楽しく暮らさす力である。』(二三)

ここには、弱者や他人への配慮が感じられる。とりわけ、「吾々は、自分の微笑を含んで居る顔色から、他が愉快的な氣をもつやうに、何時如何なる時でも、常に機嫌の好い心地をもつて、絶えず微笑して居るやう力めやう」という箇所が印象的だ。

次の段落に移ろう。次は、「徽章と少年微笑俱樂部」と題する段落である。

微笑俱樂部の会員になると、俱樂部の徽章を渡される。会員は常に此の徽章をつけて居るのであつた。よし腹が立つ事や、くさくさする不愉快な事があつても、此の徽章に対して、まあまあと我慢するやうになるのであつた。此の徽章をつけて居れば、直ぐに微笑俱樂部の会員であるといふことが分るのだから、道を通るにしても、苦虫を噛みつぶしたやうな怒つた顔や、日のあたら無い国から出て来たやうな、心配さうな顔をして居ることは

でき無いのである。(二四)

会員は常に徽章、つまりバッチを付けているのである。それは怒りの抑止力にもなり、微笑の促進力にもなるというのだ。

続けて黒田は次のような提案をしている。

少年諸君の如きは、いつも愉快な心地をもつて、常にここにこして居るから、何も態々会員になら無くつても、此の微笑俱樂部の仲間も同様であるが、中には妙にブンブンした怒虫があつたり、また変にぐちぐちした意気地無しの泣虫がある。自分は、此の少年諸君の間にも、斯ういふ目的をもつた微笑俱樂部がまた大いに必要であるやうに考へる。

何もむずかしい規則などは要ら無いのだから、十人でも十五人でも可い、其の処で此の少年微笑俱樂部のやうなものを起しては！ 申し合はせは、唯だ『いつも機嫌の好い心をもつて、にもにもして居る事』という一箇条で可い。

自分は機会を見て、日本でも大に此の微笑俱樂部を起したいと思つて居る。そして、日本国民の全部が、すべて此の会員にならんことを希望して居るものである。あゝ、ここにこ国民！ 其処に大なる光と力があるのである。(二五)

彼はまず少年に向けて「少年微笑俱樂部」というのを作つてはどうかと提案する。そして将来的には日本国民全員がこのような会の会員になることを夢見ている。この記事には三枚の笑顔の絵があるのだが、こうした笑顔の少年たちが増える事を黒田は望んでいたのだろう。

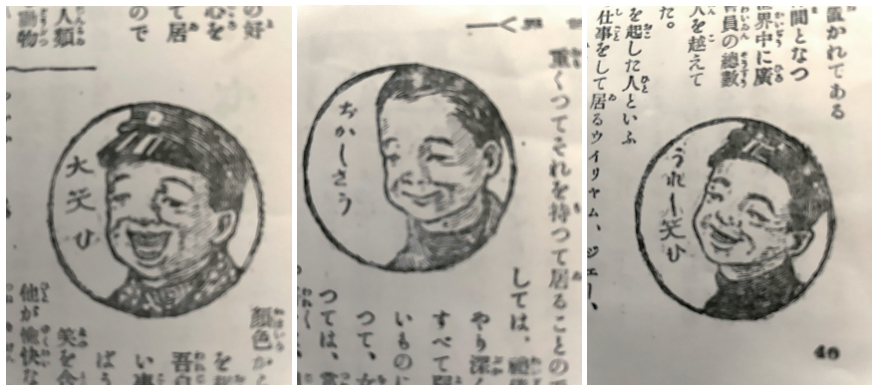


図7：黒田湖山「微笑俱樂部」挿絵
 (『少年世界』第17巻第1号)

こうした機運が、青柳や黒田によって醸成されていったのである。ちなみに、黒田は次号において「微笑俱樂部ができたらば」と題する記事を書いている。その中で黒田は、

若し正月号に書いたやうな少年微笑俱樂部ができたとする
 と、斯ういふやうな話が屢々起る。(二六)

として、それに続いてトラブルを微笑によって解決するごく短い少年向け空想小説のようなものを書いている。

そして、最後に、

斯ういふやうな風で、少年微笑俱樂部が盛になると。日本の
 我少年諸君は、今よりも更に元気の好い、更に愉快な、更に愛
 らしい人になるだらうと思はれる。(二七)

とこの記事を結んでいる。

黒田はまずは少年からこうした俱樂部を作り、それをやがては大人にまで広めていこうと考えていたように思われる。

少々余談めくが、黒田は明治三十七年(一九〇四)に「にこに太郎」という児童小説を発表している。先の紹介記事から七年前の

ことである。その冒頭を紹介しておこう。

むかしあるところにニコ太郎という少年がありました。ニコに太郎わ稚い時から他の子供と違つて、少しも怒つたり泣いたりしません。腹の立つような事があつても、悲しい事のある時でも、何んな事があつたにしても、ニコに太郎わいつも嬉しそうな顔をして、始終ニコニコ笑つて居りました。(一八)

黒田がこの小説を書いた頃、黒田はまだアメリカの「ニコニコ倶楽部」の存在を知らなかった。というよりも、まだアメリカでも発足していない時期である。だからこの小説は全くの「お伽噺」である。だが、やがてそのような世界が実現しそうな時がやってくる。それがこれから述べる日本における「ニコニコ倶楽部」の創設であつたのだ。

三 松永敏太郎による発見

青柳や黒田の提案や構想がついに実現する機会が訪れる。それは当時、不動貯金銀行・理事であつた松永敏太郎が青柳の記事を読んだことに端を発する。

それがわかる資料をまず見てみよう。

初めて日本にニコニコ倶楽部といふ名前をつけたのは此の青柳有美先生でございます、私は実業の日本の愛読者でありましたところが、『実業の日本』の「心言膽語」の中に、米国にはニコニコ倶楽部なるものがある日本でニコニコ倶楽部なるものが出来たら、渋沢男爵か馬越恭平氏、大倉喜八郎男などが先づ適当な役員だらうと、斯ういふ事が書いてあつた、夫が即ち青柳有美君が書いたので、夫から其後に、黒田湖山君が微笑倶楽部といふも

の書かれた夫が動機となつたのです、(二九)

この記事から明らかなように、まず青柳有美の記事があつた。それを見た松永は続いて黒田の記事も読んでいる。こうしたことがきっかけとなつて、「ニコニコ倶楽部」が生まれることになる。

では、その松永敏太郎とはどのような人物なのだろうか。先に不動貯金銀行・理事と述べたが、その他の事績は現行の人名辞典などではわからない。したがって、過去の資料から紹介する。

原田道寛編『大正名家録』に松永が紹介されているので、それを引用する。ここでの松永の肩書きは、雑誌『ニコニコ』主幹である。

徳島県阿波郡八幡町の医松永節斎の孫にして、明治七年十月十四日を以て生る。父を周平と呼び、氏はその長男なり。資性闊達不羈、幼時餓鬼大将の名を恣にし、小学卒業後、各専門教師に就て普通学を修む。三十年台湾総督府縦貫鉄道の嘱託を受けて渡台し、能く任務を尽して功労少なからず。後台北枋橋公学校の日本語教授を拝命し三十三年帰国して、報知新聞に入り、文筆の人となる。

されど氏は文学に長ずると共に活動家として敏腕を有し、平生傭人 権利増進を首唱す。三十七年報知社を辞して、傭人奨励会を組織し、之が機関として商日本なる週刊新聞を発刊し、鋭意之が当る。されど事意の如くならず四十年廃刊して、時事通信社を創立したが、之亦不幸、発展の緒に就く能はずして、他に譲るに至れり。

四十二年不動貯金銀行頭取牧野元次郎に知られて、同行発行の会報雑誌を主宰す。次いで牧野の雑誌『ニコニコ』を発刊して、広くニコニコ主義を普及せんとするに及んで之が理事となり、経営の衝に当り、同誌今日の盛大を見るに至らしめたるは一に氏の手腕と励精努力の結果に依らずんば非ず。

氏、性磊落豪放にして冒険を好み、豪も小事に拘泥せず。(後略) (三〇)

かなり豪快な人物であるが、文筆や経営の経験もあり、雑誌編集者として有能な人物であったと推察できる。この記事からわかるように、松永が牧野の経営する不動貯金銀行に入ったのは、明治四二年（一九〇九）のことであるから、青柳や黒田が「ニコニコ倶楽部」構想を発表する前のことだったことが確認できる。つまり、青柳や黒田の提唱がなければ、松永も「ニコニコ倶楽部」設立運動を起さなかった、いや起こせなかったかもしれないのである。もう一つ彼の事績を見ておこう。

彼は、阿波の徳島出身で、多少の学問を身につけて巡査になり^{ママ}「台湾で暫らく生活しつつ東京に出ることを心掛けている内に、報知新聞の営業部に就職し、広告の勧誘にすぐれた手腕をもって居たため、銀行方面に知られ、不動銀行の牧野元次郎さんに認められたのであった。併し元来が放浪性と多少の政治的性格があつて、明治四十年の日比谷事件で捕えられ、暴徒囂集罪で千葉の警察で何ヵ月かの判決を過し、放免になったのである。其放免のときに牧野さんが身柄を引受けて、それから後、特に不動銀行とのつながりもでき、遂に「ニコニコ」発刊の議に参画主幹として活動することになったとの事であつた。だから松永にすれば牧野には恩義があつたのは当然のこと、彼自身も自伝口述中にその事は諄々と述べているところである。(三)

松永には牧野に対し、相当な恩義があつたことがこの記述からわかる。

ともあれ、青柳や黒田、とりわけ青柳の記事に強い刺激を受け、また青柳が提示した「ニコニコ倶楽部」という名称も気に入って、日本にもこうした倶楽部を作ろうと動きだすのである。

図8は松永敏太郎の近影である。



図8：松永敏太郎肖像写真

いい笑顔である。この頃が松永の絶頂期であった。また機会があれば紹介するが、後に牧野元次郎と揉めて不動貯金銀行を辞め、その後いくつかの雑誌を発刊するも、財政難により廃刊が続く。元々酒好きだったこともあり、最期は野垂れ死にのような形で亡くなったようだ。

亡くなる少し前には明らかに松永を揶揄するような記載もある。

松永敏太郎、彼れ牧野元次郎の不動銀行に在りてニコニコ主義たるものを案出し、牧野に費用を出さしめて雑誌『ニコニコ』を発行し其の主筆となる、而して後に雑誌を廃刊し不動を去り種々なる怪しき噂を蒙るも顯然たりし、而して其のニコニコの臭気を帯ぶるより、崇を臭と転じ仇名とせらる。(一三)

この記述が本当であれば、牧野が生涯提唱した「ニコニコ主義」というのも、松永の提案、あるいは進言したものだったと思われる。

他にも次のような評がある。

彼は牧野元次郎の友人で、出獄後牧野と二人で不動銀行を起したが、其後牧野と喧嘩をして退社し、その時の退社手当て銀座に天下茶屋といふ料理屋を出した。牧野と喧嘩した折り世間の話では、若し彼が其の際喧嘩に勝てば、不動銀行は当然彼の手に帰したであろうと云はれてゐる。(一四)

牧野と仲が良かった時期は何事も上手くいっていたようだが、牧野と喧嘩別れして以降、料理屋など職業を転々と
して、あまり上手くはいかなかったようだ（二五）。

四 牧野元次郎による支援と活動

青柳の紹介や黒田の提唱に刺激を受けた松永は次のような行動に出る。

夫で私の主人であつた牧野頭取の或る宴会の時に非常に頭取初め来賓皆ニコニコして居るから、斯ういふのが
ニコニコ倶楽部であると云つたのが始り、夫が日本に於けるニコニコ倶楽部を起した動機で、其主人公の恩人は
青柳有美君であることを紹介致します。（二六）

要するに、青柳らの記事を読んでいた松永が、牧野らが出席していた宴会の様子を見て、「まるでニコニコ倶楽部の
ようだ」という主旨のことを言つたのが「ニコニコ倶楽部」設立の契機となつたのである。

ここからは少し推測になるが、その言葉を聞いた牧野が、それはどんなものかを松永に問うた。その内容や意義を
聞いた牧野は、「では、日本でもぜひ作ろうではないか」ということになつたのであろう。

前稿で記したことだが、牧野は牧野で以前から、強い大黒天信仰を持っていた（二七）。いつもニコニコしているその
笑顔に惹かれたというのである。諸書では「ニコニコ倶楽部」、および雑誌『ニコニコ』は牧野の思い付きで作られた
ように書かれているが、それは正確ではない。青柳や黒田が居て、さらには松永が話をしたからこそ、「ニコニコ倶楽
部」が設立され、そして同時に雑誌『ニコニコ』も発刊されたのである。先に松永の事績のところにもあつたように、

松永には編集能力と経験があったし、不動貯金銀行も機関誌を発行していた。

これを「ニコニコ倶楽部」を発行元とし、雑誌として売り出したのが雑誌『ニコニコ』であった。

牧野は直接アメリカの動向は知らず、松永によってそれを知った。そのうえで資金を提供し、その代わりに毎回巻頭で彼の考える「ニコニコ主義」の鼓吹を行った。したがって、正確に言えば、雑誌『ニコニコ』およびその母体である「ニコニコ倶楽部」は主として松永のアイデアであり、生涯牧野が提唱し続けたのはその名を借用した「ニコニコ主義」であったのである。

図9は牧野元次郎の写真である。その後に彼の事績を人名辞典から引く。



図9：牧野元次郎肖像写真

1874—1943 明治—昭和時代前期の銀行家。明治7年2月17日生まれ。33年不動貯金銀行(あさひ銀行の前身のひとつ)を設立し、37年頭取となる。「ニコニコ主義」をとなえて庶民の小口資金をあつめ、全国有数の貯蓄銀行に発展させた。昭和16年相談役。昭和18年12月7日死去。70歳。千葉県出身。高等商業(現一橋大)中退。(二九)

彼は最初「日蓮主義」を信奉していたようだが、人を屈服させて自分の主義を通すというそのやり方に疑問を持ったようで、日露戦争の頃から大黒天信仰に移行した(三〇)。この信仰が後に「ニコニコ主義」と呼ばれるようになったというのが実情であろう。

五 当時の時代背景

最後に当時の時代背景を見ておきたい。というのも、「ニコニコ倶楽部」の設立や、雑誌『ニコニコ』にはある切実な思いがあったからである。

まず根底にあったのが、日露戦争後に起こった不況である。この不況は長引き、大正初年ごろまで続いたとされる。たとえば、『港区教育史』第三巻には「日露戦争後の経済」という項があり、そこには次のような記述がある。

日露戦争下の増税と物価の騰貴、戦後の経済界の不況と沈滞は、一般庶民の生活を窮乏させた。日清戦争後から独占資本は形成され、財閥は繁栄した。

戦後、国民の興奮が鎮まったところから大きな労働争議があいついだ。労働者の賃上げ要求、同盟罷業があいつぎ、明治44年、市電初のストライキが行われた。本所出張所での電車運転中止をきっかけに、同年12月31日には、三田を中心に青山、新宿、浅草の各出張所でも同様の事態になった。大晦日の夜半まで、市内の交通は、ほとんど麻ひ状態になり、明治45年の元日は、ストライキの中で明けた。(三二)

ここでおわかりなのは、不況が原因となって大規模な罷免が行われたり、同じく大規模なストライキが頻繁に起こったりしたことである。政治家や経営者たちは、こうした事態を抑制することができなかった。

明治四三年(一九一〇)には、日本中を震撼させる事件が起こる。幸徳秋水らが起こしたとされる、いわゆる「大逆事件」がそれだ。天皇の暗殺まで考えていたとされるこの事件は世間に強い不安を覚えさせた。驚いたのは牧野らも同じである。念のため、辞書で「大逆事件」を引いておこう。

明治43年(1910) 多数の社会主義者・無政府主義者が明治天皇の暗殺計画容疑で検挙された事件。大逆罪の名のもとに24名に死刑が宣告され、翌年1月、幸徳秋水ら12名が処刑された。幸徳事件。(三二)

今では詳細なことが明確になっているが、当時の人々に、もつとも驚いたのは、天皇の暗殺ということであり、最も不敬かつおぞましいと思わせる出来事であった(三三)。

治安の悪化や不況を何とかして打開できないだろうか。そうした思いが多くの国民の基底にあった。その打開策として出されたものの一つに「ニコニコ倶楽部」という選択肢があった。現にアメリカを始めとする、いわゆる「先進国」、「文明国」では先んじてこうした運動が隆盛を極めていた。それに倣おうとしたのが、「ニコニコ倶楽部」の発足である。ただし、他の国では『ニコニコ』のような雑誌は刊行されていなかったようである。それは、次のような言説から推測されるものである。アメリカに十数年留学していたという人の証言である。彼は日本に『ニコニコ』という雑誌があるのを聞いて次のように言う。

吾邦に其な雑誌が出来てゐるか、そりや可いことだ。頗る面白い、如何にもゲラゲラ笑ひの莫迦莫迦しいのは駄目だが常に心が長閑なニコニコ笑ひは至極可い。……米国のニコニコか、そりや米国にも大いにあるさ。米国人は心を愉快にして能く働かうといふ人間だ。第一洪面造つて仕事が目く遣つて往かれるものではない。是非仕事はニコニコで遣つて往くに限るよ。どうも日本人は笑ふと威厳を損するやうに思つてゐるから困る。(三四)

つまり、「ニコニコ」することを推進させるために雑誌を発行したのは、日本独自の動きであり、その口絵に笑顔写真を多数掲載したことが、結果的に日本に笑顔写真を定着させるきっかけとなったのである。アメリカは先に見たよ

うに徽章によって人を繋いでいったが、日本では雑誌『ニコニコ』によって人々に「ニコニコ」の輪が広がっていったという点が異なっている。

また別の記事では次のようなことが書かれている。

諸君若し北米合衆国諸市のニコニコ劇場前に立たば、必ず右記二行の文字に逢着すべし。而して高き数丈に余る少年ニコニコ笑ひの図を見るべし。(三五)

右の図がそれである。また引用文中にあった「右記二行」とはこの図のなかにある「肥らんとする者は笑へ!! 成功せんとする者は笑へ!!」というものである。本記事の説明によると、この図は北米から帰朝した高橋啓太郎という人物が模写して持って帰ってきたものだという(三六)。

アメリカでは雑誌ではなく、倶楽部の活動や、スローガン、画像などによって「ニコニコ運動」とも呼ぶべき運動が盛んに行われていたことがわかるだろう。

ともあれ、当時の世の中に対する危機感も、「ニコニコ倶楽部」の発足、および雑誌『ニコニコ』の発刊、そして牧野の提唱する「ニコニコ主義」の流行を生み出し、促進させる動力となっていたのである。「大逆事件」の翌年の「紀元節」に倶楽部を設立し、雑誌を発行しているのは、この「大逆事件」が起こるような世相に対する危機感の表出に他ならない。

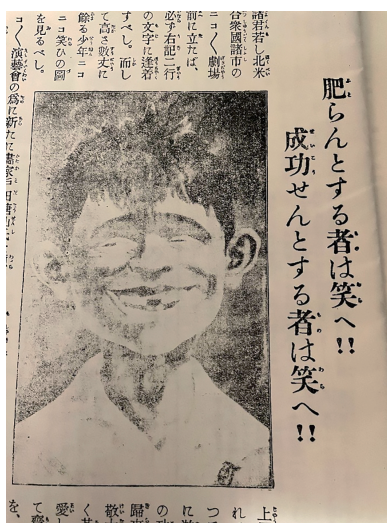


図 10：米国ニコニコ劇場にあった絵
(『ニコニコ』第 10 号)

他にどうして雑誌『ニコニコ』が世に受け入れられたのかについて述べた記述があるので、次に紹介しておこう。

事実、当時日本一の発行部数を誇っていた実業の日本社の「婦人世界」は月八、九万部のころですから「ニコニコ」の七万部は、これに次ぐものとして、その急成長ぶりに内外を驚嘆させたものでした。

なに故、このように社会にうけ容れられたかということですが、明治の時代が上からの権威主義のきわめて濃厚な社会であったこと、したがっていわゆる「笑」なるものが低級卑俗なものとした時代感覚が支配的であったこと、そんな環境や風潮に対し、「ニコニコ」の主張は、まさに一石を投じたものと申せましょう。

ときあたかも、大正デモクラシーの黎明期の幕開けをひかえ、権威主義への一つの対症療法として「ニコニコ」の平民的主張、思想が容易にうけ入れられたのではないでしょうか。「ニコニコ」の社会各方面に及ぼした心理的影響も決して軽視できないと考えられます。

ジャーナリズムでは、ようやく上層貴顕の士の笑顔写真がとりあげられるようになり、一般庶民の間では、ニコニコの語彙が一種の清新さをもつ流行語と化し、商品名に、家号に盛んに使用されるようになりました。

ともかく、「ニコニコ」は一つの社会的な寄与を果たしたわけですが、似たものを現代に求めるとすれば、さしずめ松下幸之助が「PHP」を世に問われているのと、まさに好一对と申せましょう。(三七)

明治の権威主義に対するアンチテーゼ的なものを、雑誌『ニコニコ』は持っていたようだ。なるほど、まさに創刊後にいわゆる「大正デモクラシー」の時代、つまり平民的で大衆的な世になる。その先駆的な存在が雑誌『ニコニコ』だったというわけだ。現代では、それが雑誌『PHP』に相当するとも評価している点も興味深いが、この点についてはこれ以上立ち入らない (三八)。

おわりに

本論考で明らかになったことを、次に列挙する。

・ジャーナリスト・青柳有美が雑誌において、アメリカなどで「ニコニコ」して過ごそうという運動が流行している事や、日本でも渋沢栄一や大倉喜八郎などの財界人がニコニコして富を得たと紹介した。

・次に小説家の黒田湖山が詳しくその倶楽部について紹介し、そしてまずは「少年微笑倶楽部」の設立を、引いては日本全国民に「ニコニコ倶楽部（黒田は「微笑倶楽部」と呼んでいたが）」のような組織ができてほしいものだと書いた。

・それらの記事を見た、当時、不動貯金銀行・理事であった松永敏太郎が牧野に紹介した。

・以前から「ニコニコ主義」のような取り組みができないかと考えていた牧野元次郎は松永と相談の上、「ニコニコ倶楽部」を設立し、同時に雑誌『ニコニコ』を明治四四年（一九一〇）二月一日に発行した。

・時代背景もこうした運動を後押しするものであった。とりわけ日露戦争以降、長引く不況と、明治四三年（一九一〇）に起こった「大逆事件」が重要な要素であると考えられる。

以上が、日本における「ニコニコ倶楽部」と雑誌『ニコニコ』誕生における経緯である。

ところで筆者は、当初、「ニコニコ倶楽部」は渋沢栄一などに代表されるような外国通、特に財界人によってもたらされたものではないかと推察していた。ところがそうではなかった。渋沢らは賛同したに過ぎない。

実際に、渋沢の日記の明治四四年（一九一〇）六月一三日の条には次のようにある。

ニコニコ倶楽部記者来り笑顔ノ事ニ関スル説ヲ示ス (三九)

つまり、渋沢が笑顔の効用などの説明を受けたのは、「ニコニコ倶楽部」発足後であり、雑誌『ニコニコ』の刊行後のことであつたのだ。したがって、青柳が指摘した渋沢や大倉は日ごろからニコニコした人物であつた可能性が高い。おそらくアメリカの「ニコニコ倶楽部」の面々、たとえばルーズベルトやタフト、カーネギーやハリー・ラウダーなども、日頃から楽天主義を心掛けて行動していたのではないだろうか。ともあれ、少なくとも「ニコニコ倶楽部」の発足や、雑誌『ニコニコ』の刊行には深くは関わっていないかった。

話は変わるが、令和四年(二〇二二年)に雑誌『ニコニコ』に関する日本初の企画展が開かれた。広島県府中市にある上下文化資料館での企画展である。そのFacebookページには、次のような記録が残っている。これは企画展当時の記載である。

— 企画展のお知らせ —

上下歴史文化資料館では現在、企画展「雑誌『ニコニコ』と岡田美知代」を開催しております。

大正3年〜8年の間、雑誌『ニコニコ』に作成を発表した美知代は、多くの作品を世に送り出しました。これまでも取り上げたことのない雑誌『ニコニコ』での美知代作品は、上下町ゆかりの話や海外の情報、美知代がその時感じていた事などを知ることができます。

企画展では、雑誌『ニコニコ』の生まれた背景や、作家(小説家)としての力を大きく花開かせた時代の作品をご覧くださいと思います。

期間 令和4年10月18日(火)〜令和5年1月31日(火) 10:00〜17:00

場所 上下歴史文化資料館 1階ホール

休館日 月曜日(四〇)

残念ながら筆者はこの企画展が催されていることを知らなかった。したがってどんな物がどのように展示されたのか、まったくわからない。

今後、この展示に関する聞き取り調査を行う予定である。

本稿では雑誌創刊のことについて詳しく触れたが、廃刊理由については述べなかった。せつかくの機会なので、こちらについても少し触れておきたい。

雑誌『ニコニコ』は大正六年（一九一七）一〇月に突如廃刊する。同時に「ニコニコ倶楽部」も解散。その理由は決して経済的なものではなかった。次に示すのは松永敏太郎の回顧録である。

此の大衝突（牧野との喧嘩別れ―筆者補注）は予と牧野氏との間に、一大岩壁を築き、其結果として「ニコニコ」廃刊問題は寝耳に水の如く頭取より提出されたのである。

試みに思へ、僅々十萬円の資本を以て、よく六千萬円に近き預金を贏^かち得たる不動貯金の大成功は、一に其の信用取得の機関雑誌ニコニコの功績たることは、何人も首肯する処であらう。しかも之を最もよく了解せる牧野頭取が、突然廃刊の宣言を発するに至りし理由は、他なし。即ち元来ニコニコは発行預金吸収の手段として発行せしものなれば、既に現在の如く、基礎を据ゑたる以上は、例へば夏、綿入の恩を忘るが如く、（中略）

元来ニコニコ倶楽部は実に予が生命以上の生命であり、夜が飽まで心血を灑^そいだ一期の事業であつたのだ。其の尊きニコニコなる名称も、其創立創刊も、皆之悉く予の發意發案になつたものだ。然れども其の創刊当初は、或は高利貸の提灯持雑誌、或は又ボロ銀行の御先棒雑誌と嘲り罵られ、何人も一瞥だに与へざりしを、彫心鑠骨、辛苦十年にして斯界の一權威たるを得し我が楽しくて悲しき思ひ出よ。それだけにニコニコの廃刊は、一層感慨無量、予が生命を絶つに等しいと云ふも、決して誇張ではなからう。（四二）

これはある程度信用してよい証言のように思う。少なくとも松永にはそう見えていたのである。だが、本当のところは牧野と松永しか知り得ない事だと思われる。そもそも牧野は大黒天信仰を基にした「ニコニコ主義」を広められさえすればよかったし、銀行の預金が増えればよかったのである。雑誌はその手段に過ぎなかったということだ (四二)。

牧野に言わせるならば、大黒天のようにニコニコするのには、次のような三つの意味があるという。

第一には精神の平和である。

第二には身体の健康である。

第三には商売の繁盛である。(四三)

「精神の平和」と「身体の健康」、そして「商売の繁盛」。これら三つの福徳を得るために「常大黒様のお顔を拝せよ」と言うのである。牧野にとっては、大黒天信仰と、それに基づいた「ニコニコ主義」がもつとも大切なことであり、雑誌はその宣伝媒体の一つに過ぎなかったのだ。



図 12：打出の小槌
(筆者蔵)



図 11：甲子大黒像
(筆者蔵)

だが一方の、松永にとつては違う。彼はこの雑誌に命を懸けていた。この辺りの認識の違いが浮き彫りになり、雑誌『ニコニコ』は廃刊されたということであろう。

事実、牧野は雑誌『ニコニコ』廃刊後も講演を多数行うと同時に、それを録音してレコードにして売り出してもいい。『ニコニコ主義』を生涯にわたって説き続けたのである。松永の生命が雑誌『ニコニコ』なら、牧野にとつてのそれは『ニコニコ主義』であつたのだ。

そもそも明治以来続く黒田湖水に見られた「言文一致運動」などの様々な運動や、「自然主義」や「日蓮主義」などの多くの主義や主張は、最初は個人的で限定的なものかもしれないが、その裏にはいわゆるベネディクト・アンダーソンの言う「国民国家」を作り上げるための寄与が隠れている。これは「社会主義運動」と同じであり、どういう「国民国家」を作り上げるかの違いである。現世でどのような世の中を作るのか、とりわけこの当時の運動には現世利益的な色彩が濃く見られる。とりわけその傾向が強いのが、「日蓮主義」とこの「ニコニコ主義」であろう。特にこの世に浄土的な世界を作ろうとする傾向が、この二つの主義には強く感じられる。前者は『法華経』的な浄土の実現を願ひ、後者は微笑に溢れた平和な世の中の実現を目指していたのである。

もう一つ、廃刊についての記述があるので紹介する。

しかし、残念なことに大正六年十月号をもって突如終刊に踏切らざるをえなかったのは、自己過信に陥った松永主幹が不動翁（牧野元次郎のこと―筆者補注）の使命感とはまったく背馳した方向に独走せんとするに到ったがためであります。（四四）

松永の主張はともかくとして、他人からは松永が自己過信に陥り、暴走したために、廃刊せざるを得なかったと見えていたことが、この記述からわかる。松永には突然の心変わりに見えたかもしれないが、もしかすると牧野はかな

り前から松永の過信と暴走を感じ取っていたのかもしれない。

最後に今後の課題を述べて本稿を閉じたい。

それは、他国の動向である。たとえば、日本の「ニコニコ倶楽部」に先立って出来た他国の「ニコニコ倶楽部」はどんなものだったのか、各国でどのような取り組みや工夫がなされていたのか、などを可能な限り明らかにしてみたいと思う。その過程において、各国の笑顔写真の誕生を明らかに出来れば、なお有益な結果が得られるものと思われる。こちらはかなり時間がかかりそうであるが、根気よく地道に調査をしていくしかないと考えている。

【キーワード】

雑誌『ニコニコ』、ニコニコ倶楽部、日本人の笑顔、不動産金銀行、牧野元次郎

注

(一) 岩井茂樹『笑う写真』の登場―雑誌『ニコニコ』の役割―『日本研究』国際日本文化研究センター、二〇二〇年一月。

(二) 小西四郎・岡秀行構成『モース・コレクション／写真編 百年前の日本』小学館、一九八三年より転載。

(三) 『読売新聞』一九一一年一月一四日朝刊第一面。

(四) 彼らの笑顔写真は雑誌『ニコニコ』本誌だけではなく、それをまとめた『ニコニコ写真帖』（ニコニコ倶楽部発行）でも見る事が出来る。この写真帖は毎年前年度分が増補され、版を重ねた。『ニコニコ写真帖』については、山本俊亮「笑う人々―『ニコニコ写真帖』『国立国会図書館月報』No.713/14」国立国会図書館、二〇二〇年

- (五) ニコニコ倶楽部『ニコニコ』第四八号、一九一五年一月、口絵より転載。この笑顔写真について、漱石は笑ったつもりはなかったようだが、『硝子戸の中』、これについては筆者に新資料があり、雑誌『ニコニコ』編集部は、笑顔写真だと受け止めたようである。これについては、先行研究もあるので、稿を改めて論じることにする。
- (六) 青柳有美「寸鉄活人 心言膽語」『実業之日本』第二二卷第二二号、一九〇九年一〇月一五日、実業之日本社、六一頁。
- (七) 秋田県立博物館 HP より転載。 https://www.akihaku.jp/digital/collection/contents.php?serial_no=122&category=8&language=::最終アクセス日::二〇二四年七月二四日。
- (八) 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社、二〇〇一年、一一頁。
- (九) 前掲『日本人名大辞典』、七〇五頁。
- (一〇) 黒田湖山「微笑倶楽部」『少年世界』第一七卷第一号、博文館、一九一一年一月、四〇頁。
- (一一) 同前。
- (一二) タフト著・山崎梅処訳『出世の準備』（実業之日本社、一九〇七年）には、「ニコニコ倶楽部」に関する直接的な記述はないが、「楽天主義を抱て奮闘せよ」という項目があり（八〇九頁）、「男子世に処するには、如何なる場合にも楽天主義を持して奮闘すべき」だとタフトが説いたとある。また「同氏の面容には常に和氣溢れ、人一たび其警咳に接すれば、偉大なる人格の表象たる楽天的風骨に魅せらるゝを禁ぜざる事や」とある。おそらくこれは「ニコニコ倶楽部」設立前のことであろうから、この当時のアメリカでは楽天主義が一種のムーブメントになりつつあったのかもしれない。そうした機運が醸成し、形となって現出したのが、アメリカの「ニコニコ倶楽部」だったのではないだろうか。

(二三) 前掲黒田湖山「微笑倶楽部」、四一〜四二頁。

(二四) 同前、四二頁。

(二五) 同前。

(二六) 黒風先生「微笑倶楽部ができたならば」『少年世界』第一七卷第二号、一九一一年一月増刊号、一四八頁。

(二七) 同前、一五一頁。

(二八) 黒田湖山「にこにこ太郎」木村定次郎編『お伽テール』博文館、一九〇九年。念のために申し添えておく
と、当時の児童文学では発話と同じ音で記載するという一種の「言文一致運動」が起こっていたので、引用
文もそのままにした。

(二九) 一記者『夢の世界』門出の記「夢の世界」第一巻第一号、東京国文社、一九一八年七月、一四八〜一四九
頁。

(三〇) 原田道寛編『大正名家録』二六社編纂局、一九一五年、マの部二六頁。本文には句読点はないが、読みやす
さを考慮してそれらを補った。

(三一) 天野雄吉『牧野元次郎翁 伝記でない伝記』全国不動会、一九七三年、二〇二頁。ちなみに、この著者も雑
誌『ニコニコ』に初期から関わっていた人物である。より正確に言えば大正二年（一九一三）年五月から雑
誌『ニコニコ』の記者として関わる（天沼雄吉『棗の人 棗人小伝』、東京不動会、一九七六年、一〇二〜
一〇三頁）。幸田露伴『蝸牛庵日記』（中央公論社、一九四九年）の大正三年（一九一四）九月一〇日の条に
は、「ニコニコ倶楽部天沼雄吉来る」とあり、また翌日の条には「ニコニコ倶楽部天沼使者へ草稿渡す」とい
う記述がある（二一九頁）。

(三二) 前掲『大正名家録』、マの部二六頁。

(三三) 上田景二編『模範新語通語大辞典』松本商会出版部、一九一九年、二〇頁【『ニコニコシユ』ニコニコ臭】

の項)。

(二四) 吉川守圀『荊逆星霜史』日本社会主義運動側面史』不二出版、一九八五年、九九頁。

(二五) 彼の没年は不詳であるが、鎌倉の東慶寺に墓石があるようだ。彼の晩年と没後についてのエピソードが、前

掲天沼雄吉『棗の人 棗人小伝』、二〇三〜二〇四頁にある。

(二六) 前掲一記者『夢の世界』門出の記、一四九頁。

(二七) 彼の経営した「不動貯金銀行」はその名から不動尊信仰と関係あるように思われるかもしれないが、牧野自

身が「この不動貯金と申しましたのは、動かさないで金をためるという意味でつけたので、不動さんに関係ありません」(前掲天沼雄吉『棗の人 棗人小伝』、一七頁・明治三三年(一九〇〇)一月一日に行われた創立総会での講演の引用)。

(二八) 牧野元次郎『ニコニコ全集』弘学館書店、一九二七年より転載。

(二九) 前掲『日本人名大辞典』、一七三二頁。

(三〇) この辺りの経緯については、牧野元次郎『ニコニコ論語』(静思館書房、一九一六年、一〜一四頁)に詳しい。

(三一) 港区教育委員会事務局編『港区教育史』第三巻、港区教育委員会、二〇二二年、三三一〜三三三頁。

(三二) 『デジタル大辞泉』Japanknowledge Lib. Web 版「大逆事件」の項。

(三三) 当時の人々、とくに文学者たちがこの「大逆事件」をどう受け止めて表現したのかについては、高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』(平凡社新書、二〇一〇年)に詳しいので、参照されたい。

(三四) 松田竹の島人「米国人の無邪気を学べ」『ニコニコ』第二七号、ニコニコ倶楽部、一九一三年五月、四二〜四三頁。

(三五) 『ニコニコ』第一〇号、ニコニコ倶楽部、一九一一年一月号、一七頁。

(三六) 同前。

(三七) 小原孝夫「編集後記と拾遺二つ」前掲天沼雄吉『棗の花 棗人小伝』、二九〇～二九一頁。

(三八) 牧野元次郎はかなりの靈感があり(前掲天沼雄吉『牧野元次郎翁 伝記でない伝記』に「不動翁と心霊問題」という一節があり、そこにまとめられている)それを信じていたようである。ここにも今は立ち入らないが、

当時の風潮としてこうした霊能力ブームがあったことも背景にあるのかもしれない。というのも雑誌『ニコニコ』には「千里眼事件」で有名な福来友吉が毎号のように寄稿していたからである。牧野だけではなく、青柳有美ら、当時の人々にそのような傾向があったことは、青柳の次の言葉からも伺い知ることが出来る。「▼不景気は、声の催眠術によりて世に作らるゝもの也。不景気は其の初を心理状態に発し、後に之を産業状態に及ぼすものなれば、景気挽回の第一策は、先づ人心を興奮せしめて其の萎靡を済ふにあり」(「寸鉄活人心言膽語」『実業之日本』第二卷第一八号、一九〇九年九月一日、実業之日本社、五五頁)。

(三九) 渋沢青淵記念財団竜門社『渋沢栄一伝記資料』別巻第一、日記(一)、渋沢青淵記念財団竜門社、六七七頁。

(四〇) <https://www.facebook.com/watch/?v=676131867249479> : 最終アクセス日:二〇二四年七月二六日。

(四一) 松永敏太郎「不動貯金問題 赤裸の告白(一)」『夢の世界』第一卷第七号、一九一八年一〇月、五二～五三頁。

(四二) 図11は、不動貯金銀行が販売もしくは預金者に配布していた「甲子大黒天像」である。三つの立った俵に乗っている点と、大黒天の顔が牧野の顔に似ている点が特徴である。また図12は、同じく不動貯金銀行から販売されていた「打出の小槌」である。金色をしており、ずっしりとした重量感があるのが特徴である。ここには紹介しないが、他にも大黒天が描かれた「ニコニコ風呂敷」やメダルなどがあり、筆者もそれらを所持している。

(四三) 前掲牧野『ニコニコ全集』、七一頁。筆者が所有しているのは一九二九年(わずか二年後)の第一五〇版であ

(四四)

る。一回に何部刷ったのかはわからないが、一五〇回も版を重ねていることから、当時かなり広く読まれた書物であることが推察される。

前掲小原孝夫「編集後記と拾遺二つ」、二九一頁。

Process to the Publication of the “Nico-Nico” Magazine

IWAI Shigeki

In my article "The emergence of 'laughing photos' - The role of the magazine 'Nico-Nico'" ('Japan Studies' No. 61, International Research Center for Japanese Studies, November 2020), I introduced the magazine 'Nico-Nico', which was published in 1911 by the “Nico-Nico Club” played a major role in helping Japanese people take pictures with smiles.

However, the circumstances under which this magazine was published remained a mystery for a long time. This is because the history is not written in the first issue. This paper clarified this point.

First, journalist Yumi Aoyagi introduced in 1909 in “Jitsugyo no Nippon” that a club whose credo was to put a smile on America's face was established, and that this movement had become a major movement. When Kozan Kuroda, a children's literature writer, saw this, he appealed in the magazine “Shonen Sekai” to create such a club in Japan. He even published a fantasy novel-like story about how this was realized in Japan. Fudo Savings Bank director Matsunaga Bintaro read them and suggested the establishment of such a club to the bank's president, Motojiro Makino, and on February 11, 1911, the “Nico-Nico Club” was established. At the same time, the magazine “Nico Nico” was used to encourage and spread the movement.

This paper discusses this process in detail while introducing actual materials.

Keywords: The magazine “Nico-Nico”, Nico-Nico Club, Japanese smiles, Bank of Hudo Chokin, Motojiro Makino